

# Yokohama meets Africa

## 横浜スカーフにアフリカの風



意匠認定番号33348 《洋傘に手》 昭和35年にナイジェリアの都市ラゴスに輸出されたスカーフ（部分） 横浜市歴史博物館所蔵

2022.12.3 sat. — 2023.1.15 sun.

シルク博物館

シルクセンター2F  
横浜市中区山下町1番地

主催 | シルク博物館

共催 | 横浜市歴史博物館 関東学院大学

企画・監修 | KGU横浜スカーフ研究プロジェクト

入館料 | 一般500円 シニア・大学生300円 高校生100円 小中学生無料

休館日 | 月曜日（祝日の場合は翌日） 12/11 年末年始（12/28-1/4）

# Yokohama meets Africa

## 横浜スカーフにアフリカの風

横浜を象徴する「港」——。生糸を中心に国際貿易港として日本の近代化を牽引した、その港から戦後、膨大な量のスカーフが世界各地に輸出されました。

現在、横浜市歴史博物館には昭和30年代から60年代までの輸出スカーフ見本が約11万点所蔵されています。多くの方々が想像される横浜スカーフのイメージとは異なるものかもしれません。輸出先のトップ3は北米、ヨーロッパ、アフリカです。輸出商社が海外バイヤーからの引き合いに基づき各種条件を取り決めて成約、その契約品を横浜の元請となる製造業者が受注、製造業者は機屋から生地を仕入れ、製型、捺染、水洗、整理、縫製加工といった一連の工程を各業者に委ねます。デザインは海外バイヤーから提示されることがほとんどでした。それゆえ、日本人の感覚とは思えない色や柄になるのです。

なかでも面白いのは、アフリカ向けに輸出されたスカーフです。欧米向けのものとはデザインも材質も異なります。青、緑、黄、橙、燕脂などの濃色が多く、現地の自然や文化を表象する柄、インド更紗やジャワ更紗を起源としヨーロッパで機械製造されたワックスプリント、すなわち20世紀にアフリカに販路を広げ「アフリカプリント」と称される布の流れを汲むもの、アフリカのファッションを象徴するモダンでエキサイティングな柄、また植民地統治下にあっては宗主国の王室を、独立後は新たな指導者の肖像を配した記念スカーフなど。さらに「語る布」として知られ、スワヒリ語でことわざや格言を記した東アフリカの民族衣装カンガも僅かですが見られます。

アフリカとの交易は明治30年代まで遡ります。今2022年にチュニジアで開催された第8回アフリカ開発会議、また横浜市が「アフリカに一番近い都市・横浜」として展開する国際交流を視野に入れば、アフリカへの関心は高まります。本展示では、昭和30年代に横浜から輸出されたスカーフを通じ、知られざるアフリカの風を感じ取っていただきたいと思えます。

主催 | シルク博物館

共催 | 横浜市歴史博物館

関東学院大学

企画・監修 | KGU横浜スカーフ研究プロジェクト